

大東文化歴史資料館だより

第16号 2014. 5. 30

大東文化学院時代の教員とその著述 (一)

— 漢学界の泰斗 安井小太郎 —

歴史資料館運営委員・中国学科准教授 吉田 篤志

大東文化学院時代に出版された『経学門径』という著書がある。私の手許にあるものは、昭和46(1971)年4月10日重版本(影印本)であり、神田神保町の松雲堂書店が発売元になっている。内表紙に「東京 松雲書院」とあるから、現在の松雲堂書店のことであろう。著者は安井小太郎(安政5〔1858〕年～昭和13〔1938〕年、通称は朝康、朴堂と号した)で、表紙には「安井先生述」、内表紙には「安井小太郎先生述」とあり、昭和6(1931)年3月付けの序に志道会研究部長の諸橋轍次が次のように書いている。

支那の古典研究に従事するものは、誰しも其の一半の勢力を必読書の選択に費やすを常とする。……此の際我が大東文化学院志道会研究部は、現今経学界の耆宿安井先生に御願して此の経学門径を公にする事を得た。

また同年2月付けの例言に研究部員の丸田潤二郎・渡部信治郎が次のように書いている。

一、本編は大東文化学院学生の請に因り、安井先生の筆述せられたるものなり。編纂体例の大旨左の如し。

志道会研究部とは、漢学志望の学生有志が集った研究会であり、研究部長に教員の諸橋轍次をむかえた。諸橋は『大漢和辞典』で文化勲章を賜った人物である。『経学門径』は四書五経等の儒教の経典を対象にした研究注釈書の解題であり、291種の研究書について「其の要を至簡至切に摘録」(諸橋序)したものである。安井はこの他にも『日本儒教史』(1939年)や『論語講義』『大学講義』『中庸講義』(以上1940年刊)等を著しているが、いずれも没後に刊行されている。

安井は中村貞太郎の子であるが、貞太郎が攘夷運動の人物をかくまって捕らえられて獄死したため、母方の祖父安井息軒(寛政11〔1799〕年～明治9〔1876〕年、名は衡、字は仲平)にひきとられ、安井家を継いだ。息軒は江戸に上り昌平黌で学び、飢肥藩(宮崎県日南市飢肥)の振徳堂で父滄洲と共に教授し、天保9(1838)年、藩務を辞して江戸に上り、翌年、私塾三計塾を開いて多くの塾生を育てた。陸奥宗光もその一人である。晩年(文久2〔1862〕年)は將軍直参の儒学者となった人物である。

安井は息軒や息軒に師事した島田篁村(天保9〔1838〕年～明治31〔1898〕年、名は重礼、字は敬甫)について学んだ。篁村は江戸の出身で、息軒の他に海保漁村や安積良齋に師事し、息軒の親友で幕府儒官の塩谷岩陰の推薦により昌平黌で教授し、後に東京帝大で教鞭を執った。維新後、東京下谷に私塾双桂学舎を開いて弟子の教育に尽力し、また研究に清朝考証学を取入れた人物である。長男は一高教授で中国古典学の島田鈞一であり、娘は安井と結婚した。安井は大東文化学院の他に学習院・一高等でも教鞭を執った。

大東アーカイブス 第16回 企画展

初代大学長・土屋竹雨 ～東京文政大学とその時代～

展示期間：平成26年5月27日～9月30日

（開室時間 毎週月～金曜日 9：00～17：00）

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室（板橋校舎2号館1階）

第16回企画展「初代大学長・土屋竹雨 ～東京文政大学とその時代～」展を開催いたします。

土屋竹雨は、本名を土屋久泰と言い、大東文化学院創設時より本学の発展に寄与してきました。もともとは大東文化協会の機関誌『大東文化』の主幹として運営に携わっていましたが、昭和初期より大東文化学院で教壇に立つようになりました。

敗戦後には大東文化協会の理事長となり、大東文化学院が東京文政大学という名の新制大学として再出発した際には、初代大学長に就任しました。その後は戦後社会の混乱という厳しい時代を乗り越え、「大東文化」の校名を復活させるなど、大学発展の軸となって奮闘しました。

竹雨は、一方で、昭和の時代を代表する風雅な漢詩人として知られています。漢詩の世界を愛し、詩会を主催して漢詩の世界の振興を図りました。また、漢字離れや文字離れが進む日本人に警鐘を鳴らし、多くの人に漢詩を教示しました。

旧制専門学校・大東文化学院から新制大学・東京文政大学へ、さらに文政大学・大東文化大学へと一気に駆け抜けた時代と、それを牽引した立役者の一人でもある竹雨の生涯を、その作品や書籍とともに紹介します。

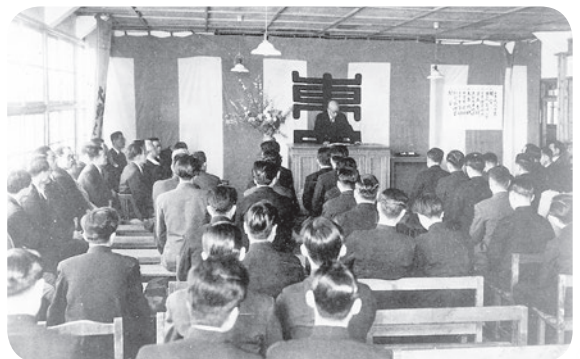
土 屋 久 泰（竹雨）【1887(明治20)年4月10日－1958(昭和33)年11月5日】

山形県鶴岡市出身。庄内藩士であった父土屋久国と母寿満との長男として生まれる。本名は久泰、字を子健、号を竹雨（ちくう）とした。書窓の寒竹を見て、自ら竹雨を名乗るようになったという。庄内中学校（現；鶴岡南高等学校）、第二高等学校を卒業後、東京帝国大学法学部へ進学。1914（大正3）年に卒業後は大須賀均軒（いんけん）等に師事し、漢詩の世界を追究する。1923(大正12)年より大東文化協会幹事となり、雑誌『大東文化』創刊に携わり、長く同誌の編集人（主幹）を務める。1931（昭和6）年より大東文化学院講師、1935（昭和10）年より同教授となった。

戦時下には故郷の鶴岡へ疎開、同地の人々に漢詩の指導を行っていたが、敗戦後に帰京、大東文化学院専門学校長となった。1948（昭和24）年、新制大学・東京文政大学の初代学長に就任。同時に大東文化学院専門学校の第14代総長もつとめ、専門学校の新制大学への移行、閉鎖までを指揮した。以降、昭和33年11月に逝去する直前まで学長職に就いた。

竹雨は、昭和期における漢詩壇の第一人者として広く知られている人物である。「最後の漢詩人」「漢詩界の巨星」とも称せられた。帝大在学中より著名な漢詩人である国分青崖（大東文化学院教授、「学院歌」作詞者）を慕って師事し、その後も大東文化学院でともに教鞭をとり、日本人の漢詩教育に貢献した。1928（昭和3）年に『東華』（芸文社）を創刊、1949（昭和24）年に日本芸術院会員となった。1950（昭和25）年、鶴岡市の以文会（現；到道博物館）顧問に就任した。

いわゆる研究論文を執筆することはあまり好まず、純粋に漢詩の世界を愛好した。漢詩選を積極的に行い、余香吟社など多くの漢詩社の指導にも携わった。主な作品に、『日本百人一詩』（砂子屋書房、1943年）、自選詩集『猗廬詩稿 乾・坤』（芸文社、1957年）等がある。享年71。



◆◆ 竹雨と大東文化学院

「漢学振興ニ関スル建議案」が代議士たちによって提出され、大東文化協会及び学院の創設が目指されていた同時期、理想の「漢学教育」を目指した学者たちも東洋文化学会を立ち上げ、「漢学振興運動」を展開していきました。竹雨も「漢詩人」として、そのメンバーの一人でした。

1923（大正12）年9月20日、大東文化学院の設立が認可されます。その経営母体となった財団法人大東文化協会は、学院の開校に先駆けて機関誌『大東文化』を発刊、協会・学院運営の目的に沿った形で国民思想の発揚を図りました。竹雨は、その編集主幹として編纂に携わりました。そのため当初は大東文化協会の活動を主としており、教壇に立つことはありませんでした。竹雨が大東生に対して漢詩の講義を始めたのは1931（昭和6）年以降のことになります。

◆◆ 新制大学へ

敗戦後、大東文化学院は廃校の危機に陥りました。「大東文化」「東亜政経科」の名称が戦時色を感じさせること、また校舎の環境、図書設備の脆弱さが指摘され、敗戦直後の混乱と種々の悪条件も重なり、学校存続は危ぶまれました。しかし、新制大学としての再興を何としても実現しようと校舎を池袋に再建することを決め、さらに校名を「東京文政大学」と変更することを決断しました。その中心となって動いたのが、当時大東文化学院専門学校長だった竹雨でした。

1949（昭和24）年より大東文化学院専門学校は新制大学へと移行し、竹雨は初代大学長に就任。東京文政大学は文政学部のみで単科大学として発足しました。

「東京文政大学」は2年後に「文政大学」へと名称を改めました。しかし、同窓生をはじめとした関係者の「大東文化」名への思い入れは深く、幾度となく名称復活の訴えがあったこともあり、首脳陣は早々に「大東文化大学」への名称変更申請を決意。新制大学となって4年後の1953（昭和28）年4月、創立30周年を記念する年に、学校法人大東文化大学へと名称変更されることとなりました。大学一期生の卒業証書は「大東文化大学」名で授与され、東京文政大学は幻の校名となりました。

1958（昭和33）年11月、竹雨が逝去しました。その後、1963（昭和38）年より大東文化大学は池袋校舎から板橋校舎へと移転するとともに、運営方針を転換し大きく飛躍していくこととなります。竹雨は新制大学となった大東文化大学の礎を築き、初代学長として本学の方向性を示したのです。（歴史資料館運営委員 浅沼薫奈）

* 大東アーカイブスの動き * 『中国語大辞典』編纂資料の調査選別・一部受入れ

『中国語大辞典』（上下2分冊、角川書店）は、本学創立60周年記念事業の一環として編集・刊行されたものです。編集主幹は香坂順一元教授（外国語学部中国語学科）で、学園直下に編纂委員会が組織され、中国全土及び日本全国の多くの研究者の協力を得て、1982（昭和57）年4月より編纂が開始されました。そして、1994（平成6）年3月、実に12年の歳月を経て、時代性と地域性に配慮した大辞典が完成しました。

編纂終了後、関係資料は総務課管理のもと、50周年記念館の地下倉庫に保存されていました。その後、板橋キャンパス再開の際の同記念館取り壊しに当たり、板橋図書館書庫棟へ移されました。

膨大な編纂資料は、中性紙ボックスに入れられた初校・再校のゲラのほか、単語ケースや中国各地の研究者とやり取りをした書簡類、編纂主旨や方針を示す資料、その他各種参考資料も含み、多岐にわたっています。2013（平成25）年度、それらの資料を処分することとなりましたが、その一部だけでもアーカイブスへ移管し貴重な記録を残せないだろうかとの声があがりました。それを受け、アーカイブスでは資料の調査選別を行い、一部を学園史関係資料として保管していくこととしました。



東松山展示室が開設されました

2014年度より、新たに東松山校舎5号館3階に常設展示室が開設されました。場所はスクールバス乗降場の真上にあたり、登下校の際にご覧いただけます。

この常設展示室では、大東文化大学の歴史を、略年表、校舎変遷図、レプリカ資料等で簡易に説明しています。是非お立ち寄りください。



<資料寄贈ご協力のお願ひ>

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関誌・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、ご連絡ください。

毎年、同窓生の方々から各種関係資料のご提供をいただいております。在学中の刊行誌、写真、体育祭・学園祭のパンフレットや記録など、とても貴重な資料です。アーカイブスでは同時に、関係者からの聞き取り調査も積極的に行っていきたく考えています。ご協力をよろしくお願ひいたします。

【大東アーカイブス活動記録】（2013年10月～2014年3月）

- | | |
|--|--|
| 10.4 青桐会より資料受贈
金山弘道氏（本学職員）より資料受贈
坂田好次氏（本学職員）より資料受贈 | 1.7 水島大二氏（同窓生）より資料受贈 |
| 10.9 全国大学史資料協議会全国大会参加
（於：明治大学・国立公文書館、～11日） | 1.8 結城正憲氏（同窓生）より資料受贈 |
| 10.17 林正統氏（本学職員）より資料受贈
総務課より資料移管 | 1.23 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：明治大学） |
| 11.12 キャリアセンターより資料移管 | 2.12 東松山校舎展示室業者打合せ |
| 11.18 企画展入替作業 | 2.24 部会会議 |
| 11.29 企画展入替作業 | 3.4 『中国語大辞典』編纂資料状態確認
東松山校舎展示室業者打合せ
日本文学科より資料移管 |
| 12.2 第15回企画展「90周年記念事業と『大東文化大学の歩んできた道』」公開 | 3.12 2013年度第二回運営委員会会議
経済学部より資料移管 |
| 12.3 東松山校舎展示室について打合せ | 3.20 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：武蔵野美術大学） |
| 12.4 東松山校舎展示室について打合せ | 3.26 東松山校舎展示室施工工事 |
| 12.12 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：武蔵野美術大学） | 3.27 東松山校舎展示室公開 |
| 12.13 ニュースレター「大東文化歴史資料館だより」Vol.15配布 | 3.28 総務課より資料移管 |
| | 3.28 第一高等学校より資料移管 |